
ドラクレブリーち 夢の共演！嵐を呼ぶ三人の勇者だゾ！

ミサミサ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラクレブリーチ 夢の共演！嵐を呼ぶ三人の勇者だゾ！

【Nコード】

N5411Q

【作者名】

ミサミサ

【あらすじ】

ある所に、一人の天才児と一人の弱弱しい少年とそして、髪の毛が黄色の高校生がいました。ある日に、いきなり家族がどこかへと消えてしまった・・・

不思議に思った3人はどの事実を解き明かそうとして・・・

ブログ・・・（前書き）

ドラえもん＆クレヨンしんちゃんとブリーチのコラボです^^

まだまだ、初心者なので、上手く書けるか分かりませんがよろしくおねがいします^^

それでは、どうぞ

それから、これは、ドラえもんとびたのバイオハザードとも少し関係があります。しかし、話が違っているところもあるので、そこはよろしく願います。

プロローグ・・・

時は、20××年7月12日朝6時

（チチチチ・・・）

鳥のさえずりが聞こえてくる時に、ある春日部での天才児の事、野原しんのすけは珍しく起きた。

「ふわーあ、おお？まだこんな時間なのか？まあいいやおしっこ、おしっこ・・・」

早く起きたしんのすけは、漏れそうになり、急いでトイレへと向かった

トイレが終わり・・・

（ジャー）

「ほう・・・気持ちがいいですねあ！」

と、しんのすけはのんきなことを言いながら、リビングへと向かうとしんのすけは、あることに気づいた。

「母ちゃん・・・？父ちゃん・・・？どこオ？」

しんのすけの母親の野原みさえと父親の野原ひろしが居なくなっていたことに・・・

その頃、野比家でも、野原家と同じ事が起きていた。

この時も、珍しく早く起きたひ弱い小学生の事、野比のびたは早く学校に行こうとして、自分の母親と父親を起こそうとした。

しかし、不思議なことに家にいるのは、ドラえもんのびたしか居なくて、

心配になったのびたは家の中をぐるりと探してみましたものの誰もいなかった。

「ママ？ パパ？」

すごく心配になったのびたは、自分の母親と父親を探しに、外へと飛び出していった。

「ゆず？ 花梨？ 親父？ どこにいやがんだ？ くそっ！ どこにもいねーじゃねーかよー！」

高校生の死神のこと黒崎一護は、家族がいきなり居なくなった事にやな予感を覚え探していた。

しかし、探しても気配さえも見当たらないのだ。

「ちくしょう！どこにいつちまったんだ。」

一護は、家族をしっかりと守れなかった事に、悔しさを感じていたふと、そこへ、あるもう一人の死神が一護の元へと駆け寄ってきた。

「一護どうしたのだ？今日は貴様は学校だろう？」

この、ミディアムの髪型をした女の事、朽木ルキアは、一護の容態

に気づき探しに来た。

何にも知らないルキアは、今日は学校だろうと問いかけていた。

「どうしたのだ？じゃねーよ、おめえ、何か知ってるだろうっ！！」

「え？何がだ？私は何も知らんぞ？」

「なに？」

「護は、信じられなさそうに言った。」

ブログ・・・（後書き）

次もよんでくださいね^^

わたしも頑張ります!!

第一章 大人が去った都市・・・ゴーストタウン（前書き）

第一章です^^

今回は、長めに作りました。

第一章 大人が去った都市・・・ゴーストタウン

その頃、のびたは、やっぱり母親と父親が居ないと、泣きながら家へと戻っていた。

そして、自分の部屋へと戻ると、ドラえもんがその時に起きていて、丁度いいと思ったのびたは

ドラえもんにすがりついた。

「ねえ、ドラえもん聞いてよ！パパとママがいないんだよ・・・。。どうしよう・・・。」

「ちょっとのびた君！何を大げさな事を言ってるんだよ、のびた君のパパとママなら、今日出かけるって言ってたじゃないか！」

「えっ？」

ドラえもんは続けた。

「のびた君聞いていなかったのか？昨日の話を」

「え？何の話？」

「全く、のびた君は駄目だなあ・・・。」

「ああ！？旅行？何だそりゃ？俺、聞いてねーぞ？」

「そうだ！旅行だ！昨日、貴様の家族がそういつてたんだ。」

一護は驚きを隠せない。

「ってか、学校あんだろ？何でこんなときに旅行とかしてんだ？おかしくねーか？それに旅行だったら、俺も誘ってくるはずだろう・・・」

「それもそうだな・・・でも、私たちは学校があると父に断っておいたんだしかし、学校も今日は無いだろうな・・・学校の先生も旅行とか言ってどこかへ消えてしまったからな・・・」

ルキアは言った。

「な・・・なんだって？」

「今日は徹底的にこの事について調べる必要があるだろう。」

「まあ・・・今日は学校もねーし、こっちは好都合だ。仕方ねーか

ら協力するぜ」

「ああ・・・よろしくな」

一護とルキアは、調べるために、とりあえず外へと行った・・・。

20××年7月12日 午前12時

その頃、春日部では、野原家にしんのすけとその親友が集まっていた。

しかし、ボーちゃんはここには居なかった。

そして、みんな、同じように、家族がいなくなっていた。
ふとそこに、

「これから、どうする?」

ある、一人のおにぎり頭のまさお君は言った。

「あっはははは!」

しかし、真面目に話している所なのにしんのすけだけはのんきにテレビを見ながら笑っていた。

その時に、二つ縛りの女の子ネネちゃんが意見を出した。

「どうするって言っても、分からないんだったら仕方がないじゃない。」

みんなが真面目に考えているのに、しんのすけだけはのんきに笑っていた。

「あはははは。」

「とりあえず、みんなで考えようよ、どうするって言い合っても何もならないからさ」

少しイケメンずらをした男の子風間君が、少しキレ気味で言った。

「えへへへ。」

それでもしんのすけは、笑っていた。

とうとうキレた風間君は、言った。

「あゝもううつとおしい！！お前なあ・・・ちよつとは空気を読めよ！空気を！大人が急に居なくなっただぞ！ちよつとは、あわてることをしろよ！」

「おお！食う気ならいっぱいあるゾ」何をご馳走してくれるのオ

」？
」

しんのすけは言った。

「あのなあ・・・食う気じゃなくて空気！たく、しんのすけの、
のんきさには、ついていけない・・・」

風間君はため息をつきながら言った。

「でもいいよねーしんちゃんは、そこまで警戒心が無いし、しんち
やんの性格はうらやましいな」

「うん、まあそれはおいといて、とりあえず、これからどうするの
？」

「そうだね、どうしよつか・・・」

「そういえば、オラ腹減ったぞ・・・」

しんちゃんが話しに入ってくる。

「それも、そうだね丁度お腹空いていたところだし」

「でも、食べるものどこにあるの？私たちはお金もってないのよ？」

「それなら、オラにまかせろー良いところがあるぞ」

「え？ホント！？」

「まあ、しんのすけが良いところあるってなら、その場所に行くか

！
」

そして、しんのすけたちはご飯を食べるために、スーパーへと向かった。

その頃、外を調べていた一護とルキアは、ある変化を目にしていた。それは、ガランとした町、そして、母親と父親を探す子供達だった。

「なんだここは・・・子供以外誰もいねーじゃねーかよ！」

「やはり・・・一護の所だけではなかったか・・・。」

「どついう意味だよ!？」

一護は聞いた。そして、ルキアはもう分かったかのように、言い始めた。

「一護の所の問題だけではなく、他の所でもそういう問題が起こっていると言う事だしかし、なぜこんな事がいきなり起きているのかは分からないがな・・・。」

「とにかく、この問題が起こってるのは、俺のところだけでは無いってことはよく分かったぜ!とにかく次は、これが、違う都市でも起こってないかそして、なんでこうなったのか、調べる必要がある

るな・・・」

「まあ、そう言う事だ！とりあえず把握は出来たし、となりの町へ行くぞ！」

「おう！了解したぜ」

そして、一護とルキアは家へと戻っていった。

ふとその時に、そつと後ろから誰かが出てきて、そして、こそこそと話していた

その時

「ふふふ・・・私たちにも気づかないなんて、相当なあほのようね・」

このおかまの顔をした女の事ハイグレ魔王は、そう言った。

「しつ・・・そんな事を言つて、油断をしていると敵にやられやすくなるよ、彼はあんな風でも、本当はもっと霊力をもっているのだからね」

この茶色の短い髪型をしている男の事藍染そつすけは言った。

「そんな事はどうでもいいっしょ！とりあえず早く面白いことをしたいっしょ！」

この変な、名前が分からない、ロボットはそう答えた。

「まあまあ・・・そういえば、あの方がおらんへんなあ〜どこにさまよっておらんのかから・・・」

この髪の毛が白くて短い人の事、市丸ギンは言った。

「あの、お方なら、まだ研究中よ、すぐに戻ってくると思うけど・・・」

「まあ、そんなにあわてなくてもきつと来るよギン、すぐにでも面白いものを見せてもらえるのだからね」

藍染はそういった。ふとそのときにいきなり、ある方が現われた。

「噂をすれば、よく来てくれたね、僕達は凄く楽しみにまっていたよ」

「ククク・・・すまないね、待たせてしまったな!」

このお方と言うのは、そう、ドラえもんたちが対戦をした。もう、死んだはずのギガゾンの事だった。

しかし、彼は死ぬ前に、姿を隠し、また、T・ウイルスのもっと凄くなるような研究をしていた。

T・ウイルスとは、そう人間をゾンビにしてしまうウイルスである。

これに感染してしまうと人間はゾンビとなり、どんなに愛する家族

でも襲ってしまったたり、敵の味方になったりしてしまうのだ。

しかし、なかなか研究が進まず、失敗に終わっていたが、ある藍染と、ギンと、ハイグレ魔王の出会いで実験は成功をしたのである。

「とりあえずどうなんや？」

「ククク・・・いい感じだよ、早くて明日にでも良いものを見せてあげられるよ。」

「それは、面白いことになりそうだね、明日にご期待するよ・・・」

「あらあ、明日からなの・・・本当は今日からみたかったけど、まあいいわ。了解するわよ」

ハイグレ魔王と、藍染は面白そうに、了解をした。

「明日から楽しみになりそうやな・・・」

ギンは言った。

第一章 大人が去った都市・・・ゴーストタウン（後書き）

次も頑張りマース^^

ちよつと話が分からなくなってしまうていて申し訳ございません・
>
<

それでもここまで読んでくれてありがとうございます^^d

第2章 恐怖の始まり（前書き）

第二章

大人たちが去ってから、今度はしんのすけ達が、変な光景を目にしていた・・・

そして、のびたの所で、また同じ恐怖が始まろうとしていた。

第2章 恐怖の始まり

「なんだよ・・・これ・・・」

その頃しんのすけ達は、ご飯を食べに行こうと外に出ていた所で

やはり、一護とルキアが見ていた光景と同じものを見ていた。

それは、

大人たちが居ないガランとしているその場所で、子供が必死に母親と父親を探すという

普段なら、ありえない光景だった。

「やっぱり、ぼくたちだけじゃなかったんだね、母親と父親がいなのは・・・」

まさお君はそう言った。

「そうだね・・・僕達だけの問題じゃないみたいだね」

風間君は言った

その時に、

「みんな何してるのオ？それって楽しいのオ？」

しんのすけが言った。

「あのなあ、楽しくってこんなことしてる訳無いだろう。全くしんのすけは……」

風間君はあきれたように言った。

「とにかく早く行きましょ！歩いてれば何か分かるかも知れないわねねちゃんと言った。

「それも、そうだね！歩いてれば何か原因がわかるかも！」

「おお！これは春日部防衛隊の出場ですなあ！」

「そうだね！」

「それじゃあ、いつもの奴やるゾ」

「おうよ！」 「うん！」 「おkー！」

「春日部防衛隊ファイヤー！！！」

「ファイヤー！！！！！」

そう言っで、ご飯を探しながら、原因を突き止めるために歩き始めた。

「旅行って何の旅行だよ！ってかなんで僕は呼ばれなかったんだよ！？」

その頃、のびたの家ではドラえもんと言い合いをしていた。

「そこまでは、聞いてないから分からないけど、とにかく今日は、パパもママも今は旅行中なの！ってか呼ばれなかったのはのびた君は学校だからにきまつてんだろ！」

ドラえもんは、納得させようとして、話していた。

「それじゃあ、なんで今日は先生がいないんだよ！おかしいだろ普通に！」

そう、のびたの学校も同じように先生方が旅行とか言い、消えてて。

そのせいで、学校は休校となっていた。

「それは、そうだけど・・・」

ドラえもんとのびたは言い合いを交わしていた時

ぶるるる〜ぶるるる

一本の電話がかかってきた。

「あゝもう、ちょっと僕が出てくるからちょっとまってるんだよ！」

「べーだ、ドラえもんなんて嫌いだ！ー！」

泣きべそをしながら、布団にもぐりこんでしまった。

「あー・・・もう全くのびたくんは・・・」

ドラえもんはあきれながら、電話に出ていた。

「はい！野比家ですけど・・・あーのびた君？のびた君なら今、泣きべそかいて寝とるよ・・・え？どうしても変わって欲しい？分かった今起こすから」

ドラえもんは、そういつてのびたの方へと電話を持っていつて。

「のびた君、ジャイアンから電話だよ」

そう言つてのびたに電話を渡す、するとのびたは瞬間で電話を取り、また布団にもぐりこんだのである。

「はい・・・僕だけど・・・」

（あ・・・のびたか？今お前どこにおんの？）

「どこつて、家だけど・・・？」

（そうか・・・あのな、急で悪いんだけど今からお前んち行つてもいいか？）

「え？うん別にいいけどどうしたの？」

（あのさ、大事な話があるんだよ、それからすねおも来るから家で待っていてくれるか？）

「」

第2章 恐怖の始まり（後書き）

編集集中・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5411q/>

ドラクレブリーち 夢の共演！嵐を呼ぶ三人の勇者だゾ！

2011年10月8日16時53分発行